

昭和の日本に留まる
 日本橋の文字が

●世界恐慌(1929年)が日本にも及び不況が深刻化した年、昭和5年。

愛知県	千葉県	東京府
<p>●豊田佐助 (織物)</p> <p>●豊島半七 (繊維問屋、豊島株式会社社長)</p> <p>●伊藤次郎左衛門 (松坂屋創業家の一族)</p>	<p>●大倉喜七郎 (大倉財閥創始者大倉喜八郎の2代目ホテルオークラの設立者)</p> <p>●茂木順三郎 (6代茂木七郎右衛門の長男、野田醤油の社長)</p>	<p>●安田善次郎 (安田財閥創始者安田善次郎の長男 2代目善次郎、安田銀行(現みずほ銀行)頭取、安田生命保険社長等歴任)</p>

内容見本

刊行にあたって
 クロスカルチャー出版編集部

小社は先に復刻版第一期(明治大正期 商工信用録(全15巻)と第二期(昭和前期 商工信用録(全20巻)を刊行し、続いて第三期(昭和前期 商工信用録(全12巻)を刊行した。今回はその続刊、第二期(昭和前期 商工信用録)第一回配本(全4巻)である。

本書は、東日本を中心とした(一部愛知・三重・富山・石川・福井を含む)商工業者の信用情報を中小商工業者レベルまで網羅しているため、企業家や会社、商店に関するソースブックとして活用できる。言わば、歴史統計資料として重要である。特に世界恐慌が日本に波及(昭和恐慌)し、不況が昭和6年頃まで続いたこの時期は、経済が苦境に陥り、社会情勢が悪化した時期でもある。研究者や図書館人にとって学術的価値の高い資料である。また、底本として使用する「商工信用録」(東京興信所)は、会員のみへの貸与であったため、今ではほとんど入手困難で図書館等の所蔵も極めて少ない。この資料の復刻する意義は大きい。

今後は2022年春に第二期(昭和前期)15巻、翌23年春に第三期(昭和前期)15巻を刊行して完結の予定である。

●人物から会社・産業がわかる、時代がよめる!!
 ●昭和前期の東日本を中心とした商工業者情報を網羅!!

北海道	新潟県	神奈川県
<p>●相馬哲平 (貸金業会社員)</p> <p>●板谷宮吉 (海運王2代目)</p>	<p>●西脇清三郎 (銀行家、西脇銀行頭取) 学匠西脇順三郎は分家生まれ</p>	<p>●平沼亮三 (貸地家会社員、横浜市長歴任)</p> <p>●原 富太郎 (生糸商、三溪園)</p>

【日本経済調査資料シリーズ7】
 ●昭和前期商工信用録 第二期第一回配本全4巻
 昭和5年・第61回総約1,850頁

第1巻 第61版 昭和5年 東京府
 第2巻 第61版 昭和5年 神奈川県・静岡縣・愛知縣・三重縣
 第3巻 第61版 昭和5年 千葉県・茨城縣・埼玉縣・栃木縣・群馬縣
 山梨縣・長野縣・新潟縣
 第4巻 第61版 昭和5年 富山縣・石川縣・福井縣・福島縣・宮城縣
 山形縣・岩手縣・秋田縣・青森縣・北海道・樺太
 上海・外國人

特色
 1 昭和初期の東日本を中心とした商工業者情報を網羅。府県ごとの業種・規模等商工業者の営業状態や資産信用情報が満載。
 2 当時の実業家・会社に関するソースブック。

今回の第61版(昭和5年)はほとんど目につけられない極めて貴重な資料

東京興信所刊「商工信用録」について
 石井研吉「明治商物起原」に「興信所の始末(第一編 金融商業部)がある。本邦興信所(民間信用調査会社)の確立は、明治25年(1892)設立の商業興信所(大倉、商工業者の営業状態や資産状況について、会員や依頼者の問合せに応じ調査、其結果を全数報告を掲載し「商工信用録」(明治29年10月)と昭和18年、都府社協明治大正期商工信用録)を刊行した。大倉に続き明治29年、東京府の銀行団が設立した東京に設立されたのが東京興信所(初代会長は大倉喜八郎)である。明治30年10月、「商工信用録」が刊行された。当時、興信所の必要性は認識されておらず、その故か、研究「明治商物起原」の記述もいたって短く、また「商工信用録」(商工信用録)ともに、会員に対して貸附されたものであり、非会員に対して販売されたこともなかった。東京興信所は、商工業者の貸付と高業の状況調査報告して商工信用の発達を助け、銀行その他商工信用の発達に寄与するの便利を興す」目的で設立。「商工信用録」はこの間の日本資本主義経済発展の重要な情報であり、研究者にとって必須の基本文献である。商工信用録であったため、図書館等の所蔵も少ない。

※2021年2月からのNHK大河ドラマ「青天を衝け」のモデルは渋沢栄一です。

簿録、白付の下の
 ぶらたはほ
 ほひる所に味
 に下ない。